

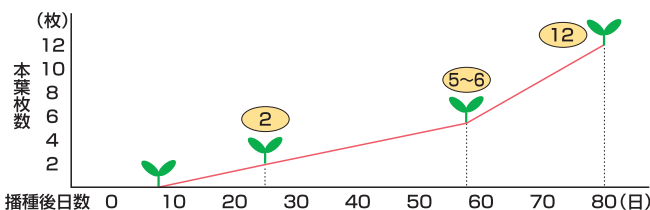
タキイのピーマン栽培マニュアル

地域	月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
露地	冷涼地	●	●		×	—	—	—	—	—	
	中間地	●	●		×	—	—	—	—	—	
	暖地	●	●		×	—	—	—	—	—	

適期表記号説明

- : タネまき
- : 育苗期
- × : 定植
- : 生育期
- : 収穫期
- : 適宜播種可能

ピーマンの育苗管理

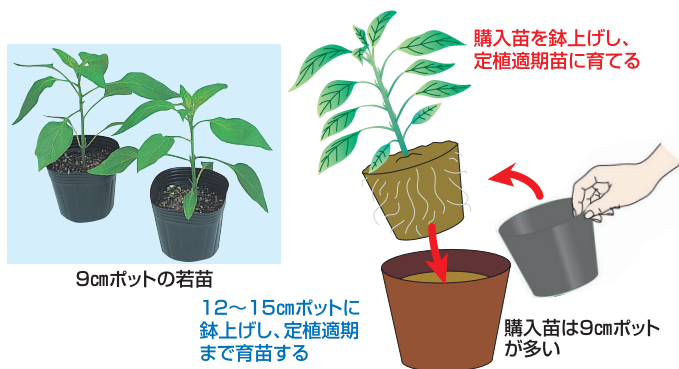


作業	播種	発芽	第1回移植 (9cmポット)	第2回移植 (15cmポット)	鉢上げ	定植
水分管理	← 適湿 →	← 適湿 →	← 少なめ →	← 乾燥気味 →		
温度(℃)	昼 27~28	夜 16~18	昼 27~28	夜 14~16	昼 26~27	夜 12~14

(注) 温度()内は地温

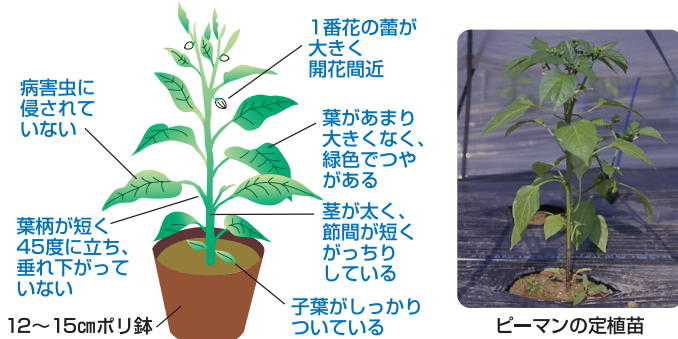
鉢上げ

販売されている苗は、9cmポット（本葉8〜9枚）の若苗が多いので、12〜15cmポットに鉢上げして1番花が開花する前まで育苗するとよいでしょう。



ピーマンの定植適期苗

1番花の開花3〜4日前が定植の適期です。蕾が見えないような若苗は過繁茂になりやすく、1番果が着果しているような老化苗では活着不良になりやすく、初期生育は順調に進みません。



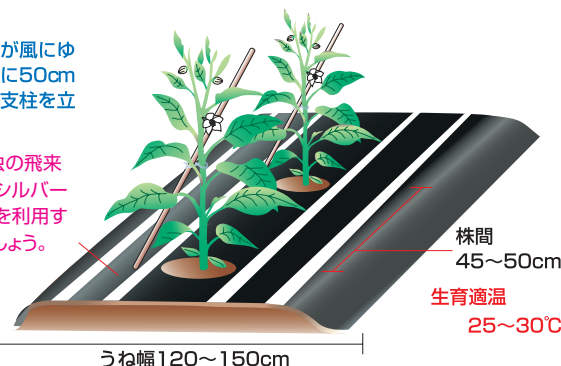
ピーマンの定植

ピーマンはナスよりも高温性で、ナス科の中では一番温度が必要です。定植時期の目安は、晩霜の心配がなく最低気温10℃以上、最低地温15℃以上になったことです。一般地の露地栽培では5月中旬ごろ、トンネル栽培では4月中下旬ごろになります。老化苗定植や植え傷みで活着不良になった場合は、薄めの液肥を数回あたえ、1〜2番果を摘果することで草勢の回復を図ります。

仮支柱立て

定植後、苗が風にゆれないように50cmくらいの仮支柱を立てる

マルチは、虫の飛来を防止するシルバーマルチなどを利用するとよいでしょう。



施肥量

元肥の量は目安として10㎡当たり成分量で、チッソ200〜250g、リン酸250〜300g、カリ200〜250gを施用します。ピーマンは長く栽培するので、有機態チッソが入った肥料を施用すると品質のよい果実がたくさん収穫できます。

定植のポイント

活着の良否がその後の生育に大きな影響を及ぼすので、定植は晴天の午前中に行います。あらかじめ鉢に十分灌水しておき、植え穴にもあらかじめたっぷりと灌水しておきます。水分と地温を確保するためにマルチを利用すると効果が高くなります。マルチングは植え付け7〜10日前までに行って、十分に地温を確保しておくこと定植後、苗の根の伸張がよくなります。

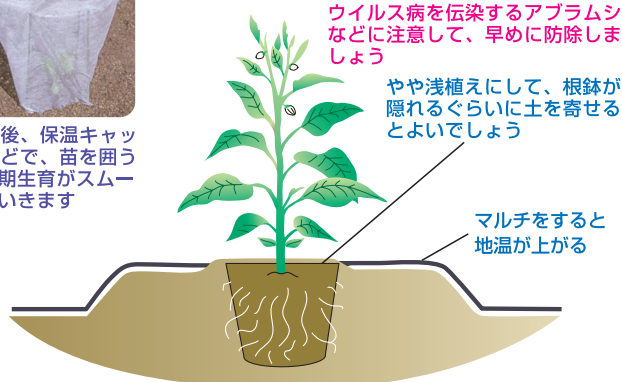


定植後、保温キャップなどで、苗を囲うと初期生育がスムーズになります

ピーマンは初期生育が遅いので、ウイルス病を伝染するアブラムシなどに注意して、早めに防除しましょう

やや浅植えにして、根鉢が隠れるぐらいに土を寄せるとよいでしょう

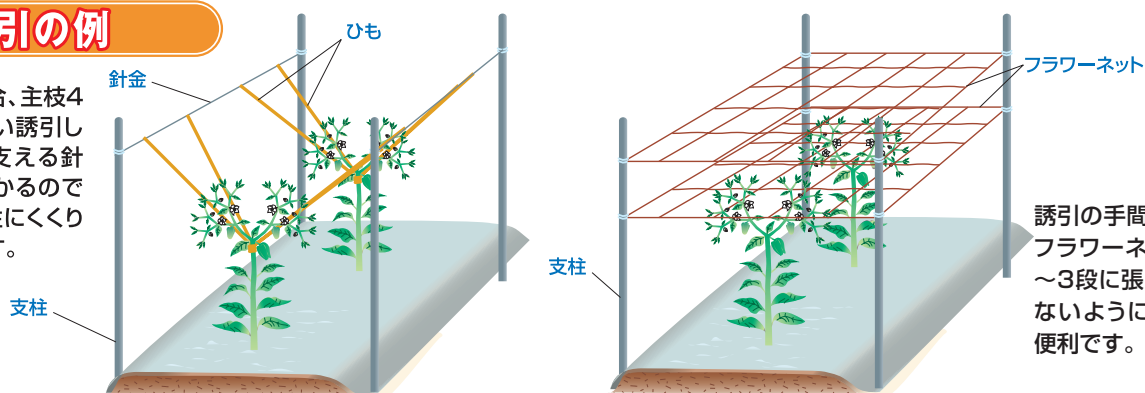
マルチをすると地温が上がる



地温15℃を目標に定植する

誘引の例

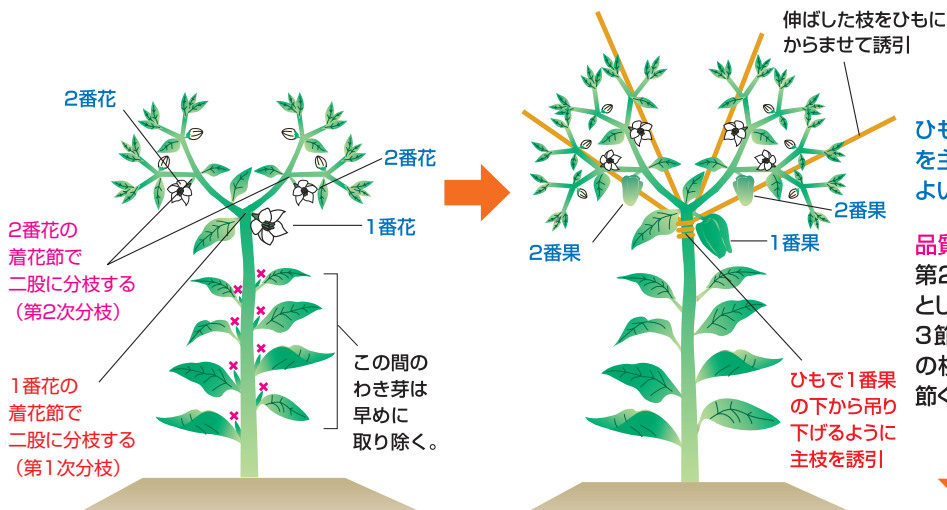
4本整枝の場合、主枝4本をひもを使い誘引します。ひもを支える針金は重さがかかるのでしっかりと支柱にくくりつけておきます。



誘引の手間を省くため、フラワーネットなどを2～3段に張り、枝が垂れないようにする方法も便利です。

ピーマンの仕立て方(4本整枝)

第1次分枝までのわき芽はすべて取り除き、第2次分枝の4本を主枝にします。露地栽培ではそれから上は放任とし、細めで着果しないふところの無効枝や徒長枝は、早めに間引きして受光態勢をよくします。花数が多くなり着果が増えてくるころには、主枝を立ち気味に誘引し草勢維持に努めます。



ひもで第2次分枝の4本を主枝として誘引するとよいでしょう。

品質重視の場合
第2次分枝の4本を主枝とし、それから先の側枝は3節ぐらいで摘芯し、その枝の収穫が終わったら1節ぐらいまで切り戻します。

追肥

●追肥

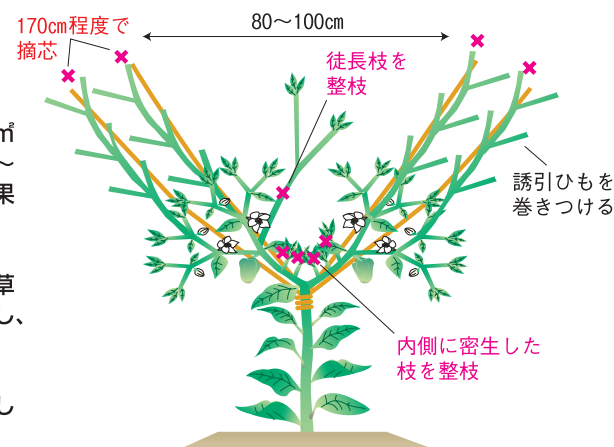
追肥は1番果の収穫始めのころから行います。化成肥料の場合、目安として10㎡当たりチッソ成分量で30gを10～14日間隔で、液肥の場合は、10～15gを5～7日間隔で施します。根傷みして肥料が効きにくい時には、葉面散布を行うと効果的です。

●追肥の間隔

草勢が落ちていて花数が増えてくれば、その後に着果負荷がかかってくるので、草勢を見ながら追肥の間隔(日数)を短くして施します。追肥が遅れると草勢が低下し、側枝の伸びや果実の肥大が鈍くなって、収量が低下するので注意します。

●尻腐れ果対策

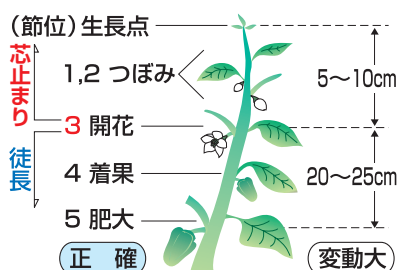
梅雨明け以降は、高温乾燥により尻腐れ果が発生しやすくなるので、土が乾いたらしっかりと灌水を行い、定期的に葉面散布剤を施用するとよいでしょう。



草勢を判断する方法

①生長点付近で判断

- ・生長点近くで開花
(下図の3より上位で開花)→**草勢低下**
- ・生長点のかなり下で開花
(下図の3より下位)→**徒長気味**



標準的な生育の目安

②花器(めしべの長さ)で判断



カラーピーマンの栽培

1～2番花は樹づくりのため摘みとります。3番果も草勢が弱いようなら緑果のうちに摘果します。その後も、着果した果実をすべて肥大させると草勢が維持できなくなるので、変形果や障害果は早めに摘果して草勢維持に努めます。

パプリカは普通のピーマンと違い、開花して50～60日程度で着色・完熟するため、長い期間がかかります。着果過多により草勢が弱ってきた場合は、緑色の幼果で収穫します。

